

1 奴隸制の展望

奴隸は常識的には、権利、自由が認められず、主人の所有物として労働を強制され、売買、譲渡の対象とされる人間である。

歴史的には一つの身分階級となったもので、エジプトにおいては五千年前から、その存在が知られている。国により処によってその形態は同じではないが、人間であっても人間と認められないという点では同じで、古代インドの法典においても二本足の動物として四つ足から区別されている。

古代のギリシャ、ローマはこの制度がもっとも良く発達した社会であることが知られており、あのけんらんたる文化はこの制度を基礎としたものであった。

日本でも魏志の和人伝に「生口」を献じたという記録があり、貢納貿易に奴隸を用いたことが知られる。

イスラム社会においても、捕虜、捕虜となった後も改宗しなかったもの、女奴隸の子などが身分的に教典によって定められたものであった。エジプト、スメル、ヘブ

ライの言葉で「異邦人」とはそのままだ「奴隸」を意味していた。

「二つの民族が共に住むには、地上はあまりに狭い」と、ある未開人が語ったと、エリゼ・ルクリュが書いているが、人種の偏見や征服、被征服の関係が奴隸制の発生に、いかに大きく働いているかがある。

奴隸を使用する社会には、すでに権力者が存在し、上下の構成が出来上っていたということであり、神官や王たちがその上座にいたのである。

権力とともに、経済的な発展もまた大きな原因の一つである。交易において奴隸は交換物の一つであったし、貨幣が使用されるようになると、富者と貧者の区別が発生し貸借関係も生じた。返済不能者は奴隸にされた。すなわち私有財産の発生、富の偏在は奴隸制を発生させ、維持するための大きな力でもあった。われわれはユダヤの古代社会に存在した、こうした事実を聖書によって知ることができる。

近世において、もっとも有名なのはアメリカにおける黒人奴隸である。

2 奴隸的心性

このように歴史的に非常に古い起源をもち、世界中に行きわたった奴隸制は、多くの国で表面的には廃止されて、すでに制度としては存在しないことになっている。

人間は保守的なものである。この保守性は、個人として、また社会として、学習によって、習慣として、また制度として保守し、伝統として世代から世代へ、社会の中で伝える。こうしたものが言語、風俗、習慣、宗教、社会制度である。こうした人間の保守性を深く考察した石川三四郎は「保守こそ進化の要因である」と言っている。だが、遺伝形質として伝える動物が、異った環境で生活しなければならなくなったとき、この形質を変えることが出来ないために、その種類の滅亡ということが起るように、人間の保守性が維持する習慣や制度を変えることは容易なことではない。

人間の知性が現実を分析し、理性に訴え、いかにあるべきかの理想を樹立するとき、これが改革や革命の要求ともなる。これは人間が新しい環境において生きるためであり、人類の滅亡からまぬかれるための必然的な要請なのだが、保守性との摩擦は避けられない。改革や革命に、しばしば流血をとまらうのはこのためである。

奴隷性が一度廃止されたことは、たしかに人間の知性、理性における勝利であった。しかしそれを発生させた経済的不平等も、権力も依然として存在している。したがって形態として、社会の中の上下の構造が存在し、その構造が存在し、その構造の中で生きて行くために、心性としても残らざるを得ない。人間の保守的な感情はこれを当然のこととして何の矛盾も感じない。それは支配と服従の関係として、官庁、会社、その他の団体の上下構造を形成している。日本においては徳川時代の封建的主従の関係が、会社や官庁その他の雇用関係に反映し、出世のために、あらゆる屈辱を忍んで上長に服従する美德が奨励されている。学校教育もこうした美德を持つ善良な役人や社員をつくることを目的として文部省の干渉を受けることになっている。現在の社会制度を保守するための奴隷的心性が要求されるのである。国家権力を維持し、資本家の安泰をはかるために、階層的構造とそれをささえる奴隷が必要なのだ。そしてそれがあるから生きられるという錯覚を持たせねばならない。

富によって、また権力によって、人間関係に上下の別をつける階層的な社会構造は、現在世界中のすべての国家によって採用されている。革命後のロシアには階級は存在しないと称している。これは共産主義と自称するすべ

ての国家の言っていることだ。なるほど生産手段の所有者であつたブルジョア階級というものは無くなっただろう。したがつてそれによつて区別されるプロレタリアも存在しなくなるというのだから、生産手段と権力がブルジョアから国家に移つて今までの資本家と国家による二元的支配が一元化しただけだ。階級が無くなったなどと言うのはゴマカシなのだ。権力組織と命令系統は資本主義諸国どこではない。

こうした階層構造は身分階級のように固定したものでなく、忠勤や成績によつて上昇する可能性のあるもので、若い者にこうした上昇の夢を持たせて訓練し、自主性をすてて服従と忠勤を上げさせる。この階層構造を肯定する社会では下積の境遇から抜け出そうとする二種の人間が存在する。一つは上位に上つて、他の者を支配しようとする者である。努力によつて一步一步上る場合もあれば、投機によつて巨万の富、でなければ、大なり小なり一つの会社を手に入れたり、あるいは革命と称する変動で権力を握つて支配的地位につこうとする者である。

今一つは、自由とは何か、平等とは何か、について考え、この上下の階層構造を否定しようとする者である。アナリストの場合はこの部類に入る者で、同じ革命を考へても、考え方が異なる。しかしこの意味での革命が

構造に挑戦することは狂気の沙汰かも知れない。だが自由、平等、友愛が要求するものはこれなのだ。

ブルードンは産業的封建制という表現をもちいているが、こうした構造はわれわれ以前から存在し、その中でわれわれは生まれ、その線にそつた教育を受けて育つて来たのである。そのために多くの者は何の矛盾も感じない。この不正に気がつく者がいても、生きて行く以上は妥協して生活しなかつたら、一日だつて生きられないという状況の中にあるのだ。

スターリン主義を支持すると言われる毛沢東は、人間の精神を基礎にするために毛沢東語録を学習させている。彼は経済的中央集権だけでは駄目だと知っている。これが文化大革命というものである。

典型的な階級構造を持つ軍隊においては、国家の名によつて殺人が公認され、そのための組織的な訓練が行われる。集団の名、国家の名による殺人には、良心の痛みを感じないですむというのだろうか。これが奴隷的心性なのだ。主人の命令なのだ。

関東大震災の朝鮮人騒ぎのデマにおどつて、「天下晴れての人殺しができた」といった者もいたと言う。奴隷的心性の持主ほど残忍なものはない。責任を負わないからだ。

もつとも狭い道であり、至難の希望であるために、アナリストの中には一時的に権力を求める者もいるが、僕はこれを否定する。

3 社会的構造

社会の階層的構造と、それに適応し、その中で盲目的に生きる人々の中には、むしろ、意識的に、そして感覚的に、その境遇を喜ぶ者もいる。

現在のアメリカで人種対立は、南よりも北において激しいと言われる。南部は長く奴隷制が存在していたところである。南北戦争の後、表面的に解放されたが、奴隷制の遺風はなかなか無くならない。依然として、奴隷的心情で主人を愛し、忠実に生きようとする者が多く、黒人と白人との間に一種の理解が存在するためではないかと思われる。

こうした社会の在り方は、前に言つたように五千年以上の歴史がある。シナの清朝が君臨したときに弁髪令をして、漢人に満州族の風習を強要した。大きな反抗もあつたが、三百年後、孫文等の革命によつて弁髪令も廃止された時、民衆は弁髪を惜しんで、又反抗が起つた。こんどの大戦中にも弁髪の老人に出会つたことがある。たつた三百年だ。これが人間の保守性だ。五千年の階級

4 無政府主義

奴隷制は人類五千年の歴史を貫いて、根の深いものである。これは封建的心性ともなつて今もわれわれの中に大きく流れている。権力と財産を中心として、上下の階層構造として今社会構造の中軸となつていのである。

奴隷制を生んだ権力構造、経済的不平等が数千年を通じて今もなお存在しているのである。これは奴隷的心性に基礎をおく階層構造によつてささえられているのだ。

これまで述べて来たことによつて、社会革命は何を指すべきかについては、分つていただけだと思う。人間の自由、平等、友愛の旗をかけたフランス革命は、まだ未完成なのだ。権力・富の私有・あるいは国家を否定しなければならぬ。この上に成立する階層構造を否定しなければならぬ。これを目指すのがアナリズムだ。だから何よりもまず、人間は奴隷的心性から脱脚し、人に対して、自己に対して責任を負う者とならねばならない。集団や国家の命令といったことに便乗する無責任な態度を捨てねばならない。したがつて個人における精神的な変革が要求される。アナリズムは個人主義を基盤としての社会革命への道である。

(十一月二十一日千葉工大で話したものの大要)

「全世界無民族性協会」(SAT)

とE・ランティ

SAT(サート)創立五十周年に

さして

今、SATとその五十年の歴史、その創立者ランティの思想を詳しく述べるには、さまざまな問題(言語、民族、教育、組織、文化など)があり課題があまりに大きいのですが、意識的な理想主義者の関心をひくために簡単に紹介をしておきたいと思います。

一八六四年オースターナショナルが設立され、労働者が国境を越えて連帯する必要を宣言してから一世紀以上がたちます。しかし、特に日本などでは今でも、世界的な規模の組織、現実的な世界観の問題など、本質的にほとんどとりあげられていないのが現実だと思います。心情的国際主義者あるいは正統派国際主義者(ハコミュニスト)はたくさんいますが。

「全世界無民族性協会」(SAT)は、一九二一年、オースターの失敗などの経験をもとに正統派国際主義者の政治主義に対抗して設立され、世界に全く新しい組織方法を示しました。それは一八八七年ザメンホフによって発表された人工語、したがって無民族的な世界語エスペ란ートの最も大きな発展です。世界中に同じ言葉を

話す労働者が存在するという事実が新しい組織の生れる条件です。一九二一年に確認されたSATの目的は、「...a、全世界の労働者階級の目的のためにエスペ란ートを実用する。b、会員間の交流を容易にさせるとともに、会員間に人間的な連帯の強固な感覚を成長させる。...d、SATの理想を写す世界文学の創造を助けることに努力する。...」また、

「SATは政治的な組織ではなく、啓蒙的な教育的な文化的な組織であり、さまざまな階級闘争を目的とした政党や労働組合運動が基礎としている政治的あるいは哲学的な学派や体系に関して、会員が相互に理解的で寛容であることをめざし、現実と思想との比較、自由な対話を通じて、会員がおのの生活環境の中で得た思想のドグマ化を防ぐことを目的とする...」

このSATの歴史は二十世紀のさまざまな思想潮流との交流、あるいは闘いの歴史です。たとえば、ドレーゼンを中心とするソビエト・エスペ란ート同盟(SEU)はSATをコミンテルンの指導の下におこうとし、失敗したので(一九三一)、SAT分裂を企てました。そのため多くのコミニストがSATをやめ、また彼らは国内でのSAT機関誌購読を禁止したので、SATは多くの会員をソビエトで失いました。

SATは世界語としてのエスペ란ートの理想とランティの獨創性によって生れたものです。E・ランティ(一八七九〜一九四七)については、一九二一年以後しか詳しくわかりませんが、自ら一九一四年まではアナキーの信者だったと書いています。多くのアナキストと知り合いジャングラブやセバスチャンフォルなどの影響を受けていたようです。しかしオースター世界大戦に対するクロボトキンやグラブなど権威的なアナキストの態度が彼を刺激し、彼は自分の頭で考えるようになりました。一九二一年ランティが四二歳のとき設立された「全世界無民族性協会」には彼のその時までの経験の全てがくみ込まれているわけです。ランティは何よりもまずエスペランティストであり、無民族主義者でした。彼はエスペ란ートを民族語にとってかわるべき世界語ととらえ、そこから導きだされるものを実践していこうとしました。彼は主著である「無民族主義者宣言」(一九三一年)の中で二十世紀において最も強力なイデオロギーである民族主義をとりあげ、国際主義(インタナショナルイズム)は語源的にも歴史的にも民族の主権を前提にしているとして、愛国主義あるいは民族主義、国際主義を鋭く批判しています。

「...哲学者や心理学者は正當にも歴史的人種や人民の

精神について述べることができるかもしれないが、そのような人種や精神は人工的なものである。それらは本質的に不変なものを含んでいず、歴史がこねあげたものである。しかし、自称革命家の中にも民族という現実を全く自然な神聖で保持すべきものだと考えているものがある。そのような視点は本質的に反動的なものである。」

「...民族が存在している。まさにそのことによって人類は病んでいる。破壊の目的のために計算できないほどのエネルギーと物資を使いながら...」

「無民族主義は民族性に対する人間性の勝利を意味し、その実現は人間の脳の内での神秘的な感覚に対する理性の勝利である。」

今年この「無民族主義者宣言」のオース版がSATから出版されました。SATの会員は現在二千人以上を数え、今年SAT五十周年、パリコミニョン百周年を記念してパリで大会が開かれました。しかし、SATの運動は今もってヨーロッパが中心で、日本では会員はあるていどいますが運動は全然行われていません。SATの運動はアジアやアフリカに広がってこそ意義があると思います。

エスペ란ートを学べ

エスペランティストは無民族となれ

☆アナルコ・エスペ란ート運動・東京(準)

野 火

リベルテールは諸君の支持によって才三年目に入った。そして体裁を変えて新しい才一步をふみ出す。新しいといっても、古代からの人間の反省と叛逆の上に形成されたアナリズムだ。われわれが新しい感覚と情熱をもって人間存在の深みに突きこんで行く以外に新しくなりようはないのだ。現象的な逆行行動の尻馬に乗ったり、権力主義に立つマルクス主義の粕をなめていては墮落するだけのことだ。われわれが新しく見直さねばならない民族問題、消費の問題、その他政治、経済、哲学、芸術の分野から、新しい視点で見直すべきものが、われわれの知性、理性の検討を待っている。こうした問題の前でリベルテールの小ささ、だが小さい者は恐れない。愚公と共に山を移そうと立っているのだ。

×

望月 桂氏から

「若い者と老人とが話し合う」これは良い事だと思ふ。成るべく多くの人と接する事は大切だ。新しいこと必ずしも良い訳でもなく、古い事必ずしもくだらない訳でもあるまい。古い種子から新しい芽が吹き、古い株から幹が伸びる。

サンジカリズムのアメリカ版、IWWは一九〇五年六月二十七日に創立されて今年六十六年目を迎え、その記念日にはKFJOを通じて一時間半にわたるラジオ放送を行った。

九月四日には本年度の大会がシカゴにおいて行われた。この大会決議では特に社会騒乱罪で起訴されたサンディエゴの労働者の釈放を要求している。

この社会騒乱罪法というのは、クリミナル・サンジカリズム（サンジカリズム犯罪者）という変わった名の法律である。最近IWWが活発になるにつれて、そのメンバーを要注意とし、騒ぎが起るとすぐこの法律によって捕えようとはじめた。サンディエゴ事件というのは、サンディエゴのスペイン系労働者のために新聞を出していた三人の労働者の印刷所を右翼に襲撃させておいて、捕えて起訴した事件で、警察のよく使う手段である。

×

大島英三郎君から

「同封のコピーの通り横倉さんのおたよりで、古田大次郎さんの墓がわかりました。先日集会（十月二日）での「獄窓から」と「死刑囚の思い出」の売上金を、あなたにご保管してあるのを（五千五百円）リベルテールであずかっている）、十二月か一月の適当な日に、ハガキ

「野火」の和田久太郎の死灰と花について、あれは「月見草」だ。彼の指名した花の中から選んだのだ。押花は堺利彦氏から感激共鳴の札状が来た。問題は小さい事だが真実を伝えるために訂正を乞う。

×

不倫・才4^{1/2}号、さっぽろ

高校生によって編集され、発行されている。「ヒッピー」とは本質的に権力を否認する。……結局僕達からの生活の中であきらめ暮すよりも、自己の生活から脱却しようとして、ヒッピー化することは権力の崩壊を促進することだ。自由を愛し欲するなら、日常的なものを脱け出すことだ。親、学校、職場、社会にさられることを拒絶することだ。……ヒッピー・コミューンなどというものもこの頃有名だが、ヒッピー同志の共同生活は個人の自由を絶対と認め、他人にあまり干渉せず、アナキーでいながら、暗黙の秩序によって暮すという感じになると思われる。僕たちがこれからやるべきことは、日常からの脱却による、状況の崩壊促進と、他方ヒッピー・コミューンのようなものを創造して行くことではないかと思う……」と書かれてある。

×

IWW

かまたは封書にして、図面をつけて集会所と日付、先日集会にきてくれた人々その他にお知らせする等ご尽力をいただきたいのです……。

同封された横倉君の手紙に「小生は古田氏の墓に詣でたのは四十数年前で、全然憶えてないので……（と古川三樹・森長弁護士の協力で探し出し）地図を描きました。青山には無名戦士の墓（社会運動に戦った人々の）もありますから帰路寄ってお詣りするのによいでしょう……」とある。人間は過去にも断ちがたく連っている。こうした善意の人々の企画に、どうか支持をあたえて欲しい。

×

ジュリオ・ミランを救え

若いリベルテール斗士ジュリオ・ミラン・ヘルナンデスが危険だ。

一九六七年十月十日、ボルト・ブーバルセロナ間の列車の中で逮捕され、バルセロナ警察のジェファツラ刑務所に入れられて訊問と拷問が続いている。一九六二年十二月二日の「マドリッドのクエンタス裁判所爆破」事件と、一九六三年三月四日のマジョルク航空のバルセロナ・バルム間の機上で爆発物が発見された事件の二つの嫌疑によるものである。否認したにもかかわらず、数日間水を飲まず訊問を続け、その後は彼自身水を拒絶し

たときは強引に飲まされたりした。軍事法廷は何の証拠も見出すことができないままバルセロナのモデロ獄に重禁錮五ヶ月に処した。こんなことでもう三年半も続いているが、彼は相変らず否認し続けている。彼を死刑執行人フランクの手先から奪い返せ。彼の生命は危いのだ。

労働運動 ― 複製版 ― 大杉栄・伊藤野枝・追悼号

ギロチン社・ネビース社・黒色戦線社 共同出版

定価 四〇〇円

推選 非合法時代に同志の出した新聞、雑誌、パンフ、ピラ等には血と汗と脂がしみこんでいる。我々にとって貴重な研究資料であり、活動への糧となるものである。今度は、「労働運動」大杉栄・伊藤野枝追悼号（大正十三年三月号）が複製された。これは当時すぐ発禁となった貴重品である。和田久太郎・岩佐太郎・延島英一・水沼辰夫・加藤一夫・富岡誠・山鹿泰治・和田栄太郎・望月桂・村木源次郎・近藤憲二らの論評や回想、葬儀の記録、伝記などが盛りされている。

編集後記

今後、読者と「リベルテール」の編集者、具体的に活動しているグループ間の交流を密接にしていきたいために、今月号から各グループ（またはある目的をもった個人的な活動）の紹介をしていきたいと思います。（実際にグループの中で活動している読者の報告を載せたいと思いますので原稿を「リベルテール」まで送って下さい。）今月はその一回目として、「SAT」の運動を紹介しました。「アナルコ・エスベラント運動」へ質問等のある方は「リベルテール」内江藤まで送って下さい。（E・K）今回は準備等の都合で、あまり情報誌的役割をはたせませんでした。今のアナキスト・グループに一番必要なのは、アナキズム運動の全体を捉えつつ、自己の運動を行っていくということではないでしょうか。そのような必要性を感じているグループの、リベルテールへの積極的介入を期待しています。おそらく、これからのアナキズム運動は、排他性と連合性の間の流動の中で、前進していくだろうと思います。排他性への固定化、連合への固定化、そのどちらもアナキズム運動の形骸化をしかもたらされないでしょう。その形骸化をさけることが、リベルテールへの投稿を、リベルテール（M・S）共

- ☆アナキズム運動年表 萩原晋太郎著 二五〇円 千三百五円
- ☆アナルコ・サンジカリズム 萩原晋太郎著 二五〇円 千五百五円
- ☆社会主義の下での人間の魂 一八〇円 千三百五円
- オスカ・ワイルド著 はしもと・よしはる訳
- ☆政治の正義 財産編 四〇〇円 千四百五円
- ウィリアム・ゴッドウィン著 はしもと・よしはる訳
- ☆科学から自由へ O・マーティン著 遠藤訳 一五〇円 千四百五円
- ☆風雪を越えて 山口健助著 一五〇円 千三百五円
- ☆日本無政府主義運動史 才一編 黒戦社版 三五〇円 千五百五円
- ☆強権主義の解剖 武良二著 二〇〇円 千三百五円
- ☆「大地」誌に発表された幸徳事件 はしもと・よしはる訳 二〇〇円 千四百五円
- ☆無政府主義者はこう答える 岩佐太郎著 一五〇円 千三百五円
- ☆獄窓から 和田久太郎著 近藤憲二編 八〇〇円 千八百五円
- ☆死刑囚の思い出 増補決定版 古田大次郎著 七〇〇円 千六百五円
- ☆無政府共産主義、人類解放への道 八太舟三著 七〇〇円 千六百五円
- ☆A.H.A.パンフ・君高校生？読んでみないか 一八〇円 千四百五円
- ☆無政府主義組織論・無政府主義とサンジカリズム エンリコ・マラテスタ著 複製版 一〇〇円 千三百五円
- ☆階級闘争説の誤謬 八太舟三著 一三〇円 千三百五円
- ☆フランス人よ共和主義者になりたければ更に努力を マルキ・ド・サド著 はしもと・よしはる訳 二五〇円 千四百五円

リベルテール 一部 100円

Le Libertaire 毎月一回15日発行

昭和46年12月15日発行 Vol. III, No 1

編集兼発行者 三浦精一

発行所 東京都練馬区大泉学園町2190

萩原晋太郎方

リベルテールの会

(振替東京133830番 三浦精一)